

妻なればわれも粧よそおわん

高橋玄洋

放送日 昭和36年2月12日
番組名 サンデー劇場
(日本電気、新日本電気)
制作 NETテレビ
演出 山本隆則
音楽 渡辺 浦人

登場人物

北島 敬之 伊藤雄之助
妻 三重子 乙羽 信子
コト子 長内美那子
智子 阿部 光子
マル子 反田 順子
俊 坊 高島 稔
看護婦 木村 昭子
母 きくの 安芸 秀子
タツチン 藤田 啓二
高安院長 加藤 精一

1 冬の空に柿の梢

来世あらば
身すく健すくよかに
夫つまに添つわん
碧みどり明あるき
空に柿照る

北島三重子歌集
// 亜麻色の髪 // より

2 柳川風景

タイトル

妻なれば
われも粧わん

(O・L)

以下、スタッフ・キャスト

風景 家の附近――

3 三重子の部屋

立雛一对、官女、それに博多人形の小さい五人囃子。

それらを前にしてマル子、コト子、智子の三人が炬燵こたつにあたっている。

マル子 コトちゃん。あんた、一寸ちったあ考あえて買あうて来あにやあ。

コト子 ばってん、これが一番よかったけん。

智子 お雛さまって金屏風の前へ坐まつとるとが相場じやろうが……。

コト子 ばってん、智ちゃんだって、こげん小さな五人囃子……。

マル子 どげんするかいな。これじゃ恰好の悪あか……なあ先生。

寝台に寝ている三重子。

三重子 三人そろいもそろって、馬鹿のごたるが、予算が一つなら人形も似たようなものが集あまるうと思うとつたが、こげなこつちや先生は、いつまでもあんたたちから目も放されんたい。

コト子 人形の数ば忘れとつたもんな。

三重子 よか、よか、先生は、あんた達の気持が嬉あしかとじゃもん。……ありがとよ。

マル子 ばってん、コトちゃん……内裏うちさまだけでもかえて貰あうてこうか？

コト子 うち……うち。

三重子 どうしたと、コトちゃん……。

コト子 先生の代りに、この内裏さま、立たしときたかったとです。ばってんばってんこれに。(泣きそうになる)

三重子 そう。……先生の代りに……そうじゃったん。

マル子 そうじゃ、この内裏さま、先生の代理に立つとりますよ。そう思えばよか。

三重子 先生の代理にね。

智子 内裏さまが代理になる。

一同、笑う。

三重子 有難とよ。……有難とよ、コトちゃん。

マル子 さッ、大掃除ば始めよう。

智子 どうした寒さかいな、炬燵から動きとうなごたる。

コト子 こげん寒かとい、よう釣りに行きんしやるなあ。ばってん北島先生、悪かばい、

折角の結婚記念日に魚釣りに出かけるなんて……。

三重子 そげん云うたって、寝台にヒモばつけて、しばとく、わけにもいかんじゃろ？

智子 それじゃ、猿廻しじゃ。(笑う)

マル子 タツチン先生がいかんたい、今日もタツチン先生が誘惑に來たとじゃろ？ 先生

……。

三重子 (ニヤニヤしている)

コト子 この間も、駅前一杯屋から二人つれのうて出て來るとこウチ見たと。

三重子 コトちゃん、気がもめるとか？

コト子 すかん先生！ (はにかんで) ウチら、未だ未だ判らんとじゃもん。

智子 コトちゃんな、タツチン先生にはもつたいなか。……ウチら、もつとすごつか男性見つけにや。

マル子 三船敏郎のごたるネ、……智ちゃん、三船敏郎のごたる人がよかとじゃと、先生、

世話してやって。

三重子 先生も好きよ、三船敏郎。

智子 わア、不貞じゃけえ。

三重子 不貞?!

コト子 旦那さまに云いつけてやらにやあ。

三重子 ……フフ、ねえ、うちのパパじゃ、何処か似とりやせん、三船敏郎に……？

教え子達 えッ。

あきれて三重子を見る。

のどかな三重子。

4 水郷

三船とは似ても似つかぬ敬之がタツチン先生(田島)と水郷で釣糸を垂れている。

敬之 駄目じゃなあ、今日は。何も喰いよらん。

田島 こりゃきつと、例のメス共が又、奥さん処とこい集まって、オマジナイ掛けとります

とばい。

敬之 ……かも知れんな(笑う) ……コトちゃんとはうまくいっとるか。

田島 いかんです。むしろにや奥さんちゆう目の上のタンコブがあるもんじゃけん。

敬之 三重子みたいな病気は、ありや君、何万人に一人も……。

田島 違うとですよ、先生ら見とると、あのメス共がつまらんごと見えていかんです。

敬之 向うでもそげん云いよるかも知れんばい。

田島 そうかも知れん。(笑う)

敬之の手に掬い上げられる砂——指の間から落ちる。

田島が見て見ぬ振りをしている。

くりかえされる砂。

田島 北島先生！ 先生は、まだ信じたるとですか？ 奥さんの体のこと……。

敬之 うむ。もう一度、この土ば踏ませてやらせたらな……。

田島 先生は、諦めるちゆうこと知らんもんな。

敬之 知らんじゃなか、出来んと。

田島 諦めにや自分が苦しいだけじゃろうも……。

敬之 それでもこうやってもう七年経ったとです。

田島 七年も……。

敬之 もう一度せめて、おんぶでええけん、外の空気ば、この柳川の空気ば吸わせてやりたか。……もう一度だけでええけんな……。

田島 わしは、苦しうてならんとです……今の世の中に……畜生！（小石を投げる）……

……多発性リウマチ様関節炎……フン、名前の長いだけが能でなかつと！（又投げる）
波紋が静かに広がってゆく。

5 三重子の部屋

掃除をしている教え子達。

寝台の三重子は、コト子に髪を梳かれながら、窓外の柿ノ木を見ている。

冬の柿の木には一つだけ取り残された柿がぶらさがっている。

智子がハタキをかけて来る。

三重子 智ちゃん、も一寸、静かに掛けてくれにや、先生にほりがかかるよ。

智子 よかし。先生は、「誇り高き女子」じゃもん。

三重子 コラッ。

教え子達（「誇り高き男」のメロディを口ずさむ）

一同、笑う。

智子、続けてハタキをかけてゆく。

その姿を目で追う三重子——その目に感謝の涙。

朗読 くじ当らば吾れにテレビを買おうと云う、教え子のセーターのつつましき継ぎ。

智子、バケツを持つと小さな玄関から出て行く。

その下駄箱の上に白い三重子の靴。それを磨くマル子。

朗読 生涯を連れだち歩む日は来ぬに、白い吾が靴磨かれおりぬ。

髪を梳いているコト子と三重子。

朗読 教え子等の前に立つを、まざまざ夢にみしことには触れず、髪梳かれおり。

一同、笑い。

コト子 ねえ、先生、ウチらが教わってた頃ときもう結婚しとってじゃったん？

マル子、帰って来る。

マル子 当り前じゃらうで、結婚十周年記念日だつて云うのに……。

コト子 あッそうか。

智子も帰って来る。

智子 どうして、昔のままの池上先生で通しちゃったんですか、先生。

三重子 ばってん、何んとなく恥かしかったけん。

智子 わア、先生でも！

三重子 こらッ！

マル子 勿論恋愛でしょ？

三重子 残念でした……純然たるお見合よ。(教え子達、がっかりする) それ、青木先生、いらしったでしょう。

智子 ああ、鬼婆ッ。(云って口を押える)

三重子 あの青木先生がパパの叔母さんなのよ。そいで叔母からことづかりました、って柿を持って来て呉れたの、私の下宿してたお寺に……。

コト子 そうじゃ、先生、三年の頃は勝運寺に居んなさったね。

マル子 第一印象は？

三重子 なあんだ、こんな男かと思った。前に青木先生から話は聞いたったんじゃけどね。

智子 わア、無理しちよる、無理しちよる。

三重子 本当よ。

マル子 じゃ今は？

三重子 まあ、一寸はましね。

教え子達 わあッ、罰が当たるけん。

コト子 ねえ、先生、先生は新婚旅行、何処へ行ったとですか。

三重子 新婚旅行なんか行かんじゃったと……でも、半年ほどして湯の平温泉へ行ったことがあったとですよ十日間、あれがハネムーンと云えばハネムーンだし、先生らにとつて、元気な時分のたつた一つの想い出なんですよ。

コト子 フーン。

回想に沈む三重子。

(O・L)

6 小学校の校庭

遊戯をする児童たち。

M オルガン

昭和二十六年

7 湯の平温泉

小川の端に鍋釜が洗いさしで放り出されている。

野菊の一面に咲いてる中で、敬之が三脚を立てて絵を描いている。

SE うぐいす。

湯治客が通って行く。

敬之、三重子の居ないのに気付く。

敬之 おい、三重子……、三重子！ おーい！ 三重子！

敬之、小川端まで探しに行くが見つからない。
三重子は大木の後に隠れている。

が、夫が背を向けていて戻つて来て三重子の白い靴を見つける。
敬之、探しながら、戻つて来て三重子の白い靴を見つける。

敬之 (わざと遠くへ) 三重子! …… 三重子!

三重子、知らぬふりをして目を閉じている。

三重子 ……。

敬之 あの、もし、この辺を、たった今、女が通りまっせんでしたか。

三重子 女の人? さあ…… 私は目が見えまっせんもんですから……。

敬之 じゃ、矢張り水の中へ落ちたとじゃるか。

三重子 そうかも知れまっせんね。あなたが、あんまり絵にばかり夢中になっているんで、きつと絶望して飛び込んだのでっしょう。

敬之 そうでっしょう。きつと。

三重子 悲しゅうないとですか、奥様が水の中へ飛び込んだちゅうのに……。

敬之も並んで坐る。

敬之 ええ、丁度、良かったです。又、新しかお嫁さんば貰えるし……。

三重子 それはよごさいましたね。

敬之 ばつてん、盲のくせに、よう僕が絵を描いとることが判りましたね。

三重子 それはその……つまり、…… (つまつて吹き出してしまふ) この、浮気者メ!

三重子、起き上ると敬之の上に倒れかかり、野菊の上を二転三転する。

敬之

三重子 フフフ、ハハハ。

三重子 あッ、うぐいすが鳴いてる。

敬之 うむ。

三重子 半年ぶりに初めて二人だけになれたのね。

敬之 うん、来てよかつたな、…… (画架をさし) どうだい、仲々いいだろう。

三重子 フフ、残念ながら、貴方には盲学校の英語の先生の方が向いとりますね。

敬之 こいつ!

三重子 いやッ……ねえ、私、前から考えとつただけど何とかして二人とも大学へ行きましようよ。

敬之 大学へ? 久留米のかい。

三重子 そうよ、これからの世の中は大学を出てなきや駄目よ。ねえ、無理なら夜間でもいいわ。二人共、お勤めが済んでから夜学するのよ。

敬之 しかし、そのためには、うんと勉強しなきゃ、特に君は英語を……。

三重子 ええ、やるわ、きつと頑張るからあんた教えて。

敬之 ようし、一丁やっちゃろうか。

三重子 やっちゃろう!

敬之 ばつてん、怖い先生だぞ。

三重子 OKッ! ……そして、卒業したら、うんと子供ば生みまっしょ。

敬之 うむ、子供はそれからでも遅いことなか。

三重子 女三人に男三人……。

敬之 へえ、そげん、生んでこわれんか……？

三重子 バリバリ生ンみあげてバリバリ育てるのよ、私子供が好きじゃったけん、教師になつた位いだもン、大丈夫よ。

敬之 男の三人は多過ぎることなかか？ うちは畠が少いけん……。

三重子 ううん、百姓を継ぐのは一人だけ、あとは学校いかせてサラリーマンにするのです、……百姓ン処に来る嫁は可哀想じゃもん。

敬之 三重子……お前そんなに……？

三重子 えッ？

敬之 そげん、今の生活がっらいとか。

三重子 ううん、そうじゃなかと……お父さんも、お母さんも、そりゃあいい人だし、玉ちゃんだつて、清ちゃんだつて、俊坊だつて私好き……でも、でも……家じゃ、こうやつて二人だけでお話することも出来ンもン。そうでつしよう……貴方ン処へ嫁に来たンですもん、貴方の御飯ぐらい焚きたか、貴方のおかず位い、みつくるいたか、……：：：：そうでしょう？……あたしは何時も思うと、貴方が学校から「只今ッ」つて帰つて来る。「お帰りなさいッ」つて飛び出して行って、着替えを手伝うたり、ネクタイを解いたり……：。そして、あんたの好きなお鮎子の用意ばして「ハイ」（つぐ真似……涙声になりかかる）

敬之 三重子。

敬之、やさしく三重子を抱いてやる。

三重子、敬之の胸に泣く。

放置されてるささやかな自炊道具。

(O・L)

上りかまちの弁当箱四つに、三重子の手が、次々に御飯をつめてゆく。

——その下の土間に雑多に並んでいる地下足袋。ぞうり、靴、ズック。

(O・L)

黒板に地図を書きながら教えている三重子。

九州の地図である。

三重子 ……ですから、この阿蘇山や九重山を中心に沢山の温泉があるのです。別府、湯の平……この湯の平には先生も行きましたが、水のきれいな、とつてもいい処です。うぐいすも鳴いててね……。

別府に○をつけ、湯の平を書こうとして白墨を落す——が、又拾つて書く、——又落す。

不思議に思つて指を見るが、余り気にも止めず、又書き出す。

M 不吉なものが流れ始め、次第にその度を増してゆく。

(O・L)

夜になつていて、空の弁当箱が四つ……次々に洗われてゆく。

庭で金魚池を見ている敬之、美事なランチュウが泳いでいる。

弁当箱を洗いおえて、お鍋を下げようとして落す。

ハツとして奥の方を気にする三重子。

時計は十時を廻っている。

父の声 どうしたとか？

三重子 い、いえ何でもありません。(じつと自分の手を見る)

三重子は入口まで行つて外へ、

三重子 (声を殺して) あんたッ……あんた。

熱心に金魚を見ている敬之。

敬之 うーむ(生返事) 今晚にもこいつ、卵生むかも知れんぞ……。

三重子 あんた。

敬之 (池を見たまま) 待つとれ、直ぐ行くけん……一寸、藁ば持つて来て呉れんか。

三重子、戸口を離れ、そのまま直ぐの間へ上り、もう敷かされている布団の上に坐り込む。

敬之の声 おーい、三重子。

三重子 ……。

返事がないので敬之入つて来て横目に三重子を見ながら、土間を通り抜け、又藁を持つて庭へ行く。

かたくなに動かぬ三重子。

(間)

敬之、手を拭きながら入つて来る。

敬之 ……明日の朝は、ええ卵生んどるかも知れんぞ。どうしたとか？

三重子 ……。

敬之 何ば怒つとるか？……どうしたと？……云わにやあ判らんじやろが！

三重子 あんたは、金魚とあたしとどっちが大事ですと？

敬之 なんじゃ、そげんことか。

三重子 そげんことじゃなかと……ねえ、どっちが大事ですと？

敬之 そりやお前、金魚と女房を比べられるかい。

敬之、部屋の隅から小さな碁盤と石を持つて来る。

三重子 ばつてん、金魚の半分もあたしの世話みて呉れんじやないですか？

敬之 そげん云うたつて、金魚には口も手もなかとじゃけんな……さア、そげん怖い顔

せんと、気嫌直して……な。

碁盤を開いて石を置く。

三重子 そげんなことで、気嫌ばとろうつたつて……もうその手は喰いまっせん。

敬之 金魚は趣味……女房は趣味で飼えるか。

三重子 (吹き出してう) あたしのこと、かもうてくれんと、留守の間に、あの金魚全

部、池のふちい並べて水から上げて、日干しにしてあげますけん。(石を置く)

敬之 うん、判つた、判つた判つた。

三重子 何が判つたとですか……ほんに、金魚にヤキモチば焼きよる女房が日本中に他に

おりますじやろか。

三重子、石を打ちかけて落す。

敬之 どうしたとか？

三重子 ううん、何でもなか、……一寸、興奮したとでっしよう、この指も……。

やつと拾って打ち直す。と、又次の石が指の間からはずれて落ちる。

敬之 ほんなことどうしたとか？ 今までこげんことあったとか。

三重子 ううん……ねえ、済みませんけど、明日からあなたの自転車の後に乗せてつてよ。あたしの自転車、ペタルがサクサクしてつまらんと。

敬之 ペタルより、膝がガクガクするんじゃなかか。

三重子 フフ、子供達がひやかすでっしようね。

敬之 うちの生徒はみんな盲じゃけん、判らんばつてん……さあ、もう寝ろう、あんまり疲れすぎるとじゃ、きみ。

三重子 ええ、ほんとにそうね、この間からPTAの会や日教組の講習会やらが重なったけん。

三重子、やおら立って着替えはじめる。

敬之 ちよっ一寸、見て来るけんな、……ええじゃろう。

三重子 (素直に) 冷えんように、直ぐ戻って来るとですよ。

敬之 うん、判つとる。

敬之、そそくさと金魚を見に行く。

SE 遠く犬が吠えている。

静かに産卵の時を待つランチュウ。

夫婦の部屋の電気が消える。

(O・L)

○柱時計 二時。

三重子、うなされて起き上る。夢だと判つてほつとし、かわやへ立とうとすると関節がガクガクになっている。

転びそうになって、柱につかまろうとすると手の関節も効かない。

その手を見、足をさすり、もう一度立ちかける——前よりは少し立てるが又倒れる。もう一度。

仕方なく壁までいざつて行き、背中を壁にもたせて横ばいに移動させる。

顔に玉の汗。

それでも途中で倒れ、布団にうつ伏す。

三重子 あなたッ。

敬之、驚いて起き上る。

敬之 三重子、どうしたとか？

三重子 あなたッ……関節が、関節がガクガクして。

敬之 えッ、そりゃいかん、先生ば呼ぼう。……(隣室に) 俊坊……。

三重子 駄目よ、起しちや、みんなよく休んどるとじゃき。

敬之 馬鹿ッ、そげな遠慮ばしとる場合じゃなか……俊坊、一寸、起きてくれ。

俊坊の声 どげんしたと？

敬之 姉さんがおかしいんじや、病院の先生ば直ぐに起して来てくれ。

俊坊、頭をのぞかせる。

俊坊 うん、よっしゃ。

三重子 よかと、俊ちゃん……いかなでもよかと。……疲れとるだけじゃけん、疲れが出ただけじゃけん。……明日起きたら、直ってるでっしゃよう。

敬之 関節の力が抜けてきかんようになったらしいんだ。

俊坊、寝巻の上に洋服を着て出て来る。

俊坊 先生にそう云う……姉さん、直ぐ連れて来るからな、頑張ってるんだよ。

俊坊、自転車を押して飛び出して行く。

三重子は尚も起き上ろうとつたない努力を重ねている。

三重子 大丈夫よ、疲れとるだけじゃけん……明日起きたらきつと……。

その枕辺に英語のリーダー。

(O・L)

○歎異抄

○脚のレントゲン写真

憚らず

一人の部屋に慟哭す

極まる秋も

脚立たずけり

朗 読(右の文)

○三部経 斗病記等

そして一年

○柳川風景

嫁かぬまま

病まば悲しみの

今よりは

少なからんに

雨に覚めおり

朗 読(右の文)

9 別府国立病院

廊下を手押車が患者を運んでゆく。

そして又一年

(O・L)

別府国立病院

(O・L)

看護婦が来て三重子の病室に入っていく。

10 芝生に見える病室(個室)

寝台に三重子が寝ている。

看護婦、入って来る。

看護婦 北島さん、おごつて下さいッ。

三重子 大人をいじめるもんじゃなかとです。早ようお出しなさい。

看護婦 ハイ(差出し)定期便!……ただで開けるの、もったいないわ。(封を切る)

三重子 ヨウカンおごるわよ。

看護婦、読みやすい様に置いてやる。

三重子、やっと手を出して読む。

看護婦 (枕辺のノートを見て) また歌を考えてたのね。

三重子 駄目よ、読んじや。

看護婦 (読む) 夫恋うる心、暫くは他に移さん、もみじ葉群は透きてそよげり……夫恋

うる心……。

三重子 フフ、こんな小母ちゃんが、おかしいでっしょ? 夫恋うるなんて……ああ、恥

かしッ。

看護婦 素敵だわ。北島さん達の御夫婦みてるよ、この世のものとは思われないわ。

三重子 わアッ怖い……今度は何ばおごらされるじやろうか。

看護婦 真面目よ、大真面目よ。つくづく、夫婦っていいもんだなあと思うの。

三重子 (突然) 木村さんッ……来るんだって、今日……。

木村 エッ本当? よかったじゃない。そう……やっどこれも役に立ったわけネ。

部屋の隅のバケツにビールが二本冷やしてある。

三重子 木村さんのお蔭よ、……ね、お願い、その抽出しの中……。

木村 (こっくりする)

木村、枕元の抽出しを出し、三重子の唇を描いてやる。

じつと耐えてつけて貰う三重子。

木村 ハイ、綺麗よ。

三重子 有難う。

木村 二十日振り位いね。

三重子 二十二日目よ。

木村 何時のバスかしら……、(枕元の亜麻色の髪の人形を指先ではじき) コラ、今日は、あんたが来るんだよ。

木村、行きかける。

三重子 あのこと……。

木村 えッ？

三重子 木村さん、もう少しここに居て。

木村 あら、旦那さまがいらっしやれば私は無用の長物でしょ。

三重子 ねえ、私は怖かと、あの人の顔を見るとが本当は怖かと。

木村 まあ、あんなに首を長くして待ってたくせに。

三重子 ううん……夫恋うる心なんて勝手にいい気な歌なんか詠んでるけど、私はあの人の妻じゃなかとよ……そうでっしょ、妻としてしなきゃならんことを何もしてやれんんじゃないもん。

木村 そりゃ、今は病氣なンだから仕方ないわ。

三重子 ばってん、今は仕方ななかちゆうたって……ねえ、これから先だってどうなの？昔のように元気になれる可能性が百に一つある？ ね、教えて頂戴、ほんの……針の穴ほどの望みもあると？

木村 私はただの看護婦だから、はっきりしたことは判らないけど、でも院長室で小耳にはさんだんですけど、北島さん、近く退院出来るかも知れないのよ。

三重子 嘘々！ 気休めば云わんといて！ 私にはちゃんと判つとる。その証拠には、入院した時にはまだこの手で涙ば拭けたとです……ね、木村さん、人間一人生きてるッてどう云うこと？ こげんして、じつと眼ば開いて呼吸しとるってこと？ それでも生きてるって云えると？

木村 北島さん、何てことを！

三重子 判つてると、私だつて……みんなが待つてるのが何かってこと位い……ただ誰も口に出して云わんだけじゃも……それより他にや解決はつきまっせんものね。

木村 北島さんッ！ それじゃ私達は一体何のためにこうやって北島さんのお世話してるんです？……第一、それじゃ、あんなに一生懸命になつていらっしやる旦那さまに申し訳ないじゃないの。

三重子 申し訳ないとは、私がこげんして生きてることよ。私が死ななきゃ、あの人はいつまでたつても幸せになれまっせん、男なら誰でもが持つとる当りまえの欲望さえ……。

木村 それだけが人間の総てじゃないわ……。

三重子 そうよ。でも……でも、あなただつて結婚すればきつと思ひ知らされるとよ、夫婦にとつちやあ、それがどんなに大事なことかつてことが……。

木村 じゃ、平気で、他の女に旦那さん譲れるって云うの？

三重子 しようのなかもん。

木村 嘘よ、嘘よ、それこそ大嘘よ。夫婦なんてそんなもんじゃないと思う。

三重子 そりゃ、私だつて女よ……あの人が、他の女に譲るなんて考えただけでもぞつとするわ……ばってん、女としてこげん身体ば、その人の目の前にさらしておくとは、もつともつとつらかもん、……ううん、それが本音かも知れんわねえ、……御免なさい、我まま云つて……。

木村、優しく首をふり三重子の涙をふいてやる。

院長の高安博士と敬之が話している。

敬之 ……そうですか、矢つ張り駄目ですか。

高安 病院としても色々折衝してみたんだが、何様健康保険と云う奴は、万法規づめでね……人間の情など入り込む余地が全くないんだ……それで、仮にあんたの方の扶養家族扱いにしても、当然半額は現金支払いと云うことになるし、いや、それでも入院してるだけの効果が多少なりともあれば、それもいいんだが……奥さんの場合は……。

敬之 ……見込みがないと云われるんですか。

高安 いや、そうじゃない。病院も自宅も変りないと云うことだ……つまり、今直ぐ急にどうと云うことも無いし、入院してたからと云って良くなることも期待出来ない。その日その日の天候に身を委せるより仕方がない状態なんだ。

敬之 判りました。引取って帰りまっしょう。

高安 その方がいいと思う……発病の初期に適切な処置さえ受けてれば、こんなことにはならなかったんだが。奥さんは、本当に我慢強い人だから……よくもああなるまで我慢出来たものだ。

敬之 長い間、有難うございました。

高安、だまって一礼する。

高安 ゆっくり休める部屋はあるんでしょうな。

敬之 ……里の方へ帰そうと思っとります。

高安 そうですか……勝手な云い方だが、あとは貴方だけが頼りです、大事にしてあげてください。

今度は敬之の方が黙って一礼すると病室の方へ歩き出す。

見送る高安院長。

敬之、病室の前で一寸止ってから意を決したように扉を開ける。

12 病室

敬之、入って来る。

敬之 やあ。

木村 あッ、いらっしやいませ、お待兼ねでしたのよ。

緊張している三重子。

木村、三重子に「云っては駄目よ」と云う風に目でたしなめて出て行く。

三重子 お帰えんなさい。

敬之 どうだい、調子は……。

三重子 ええまあ。

敬之 そうかい、それは良かった……。

三重子 貴方もお元気そうね。

敬之 ああ、すごく元気だよ……裏の柿持って来た、今年はよくなってね。

三重子 そう。

二人、じつとお互いの感慨で耐えている。

庭を回復期の患者が通ってゆく。

(間)

三重子 フフ、何だか変だわ……お掛けなさいよ。
敬之 いいんだらう？ 散歩しよう。

三重子 (童女のようにうなずく) 又軽くなったでしょう。

敬之 い、いやそうでもないよ。

三重子 手の少しきくごとなたとですよ。

敬之 本当だ。さつき院長先生も、退院してよかと云わしやったもん。

敬之、三重子を起してやり、おんぶして庭へ出てゆく。

その後姿。

○車窓を流れる風景。

朗 読 癒えぬまま帰る慨きは秘めおかん、豊後路の秋夫と賞でいつ。

13 里の家 池上家

(木枯らしの強い冬の夜)

布団にすがって坐って鉛筆を持つ三重子。

母、きくのが入って来る。

きくの まだ、今日は来らっしゃれんか、敬之さん。

三重子 来るもんね、来たって仕様がなかもん。

きくの こげん風が冷たいんじや、なんぼ自転車でも柳川から二里の道は無理じやも、又

暖かい日に来て呉れるとじやろ……行火の火、大丈夫か？

三重子 うん。

きくの 早う寝んと又悪うなるぞ！

三重子 歌ば作つとるとじやけん。一寸、静かにしといてよ。

きくの ハイハイ。(行きかける)

三重子 母さん、知つとるな。

きくの 何バ？

三重子 柳川じや、主屋の隣りに新築しよるとよ。

きくの そうじやげなあ、俊ちゃんでも嫁さん貰うとじやろうか。

三重子 うちの人も知れん。

きくの 敬之さん、何も云わっしゃらんか。

三重子 聞きゃせんと私も……私にや何の関係もないことじやけんな。

きくの 夫婦ってそげんもんじやなか……そりやあ、俊ちゃんが分家するんじやろ。

三重子 母さんこそ早よ寝らにや、明日又早いんじやろ！

きくの ああ、おやすみ。

三重子 おやすみ。

きくの、隣室へ去る。

三重子、再び書きかけるが、思う様に手が動かずいらいらして放り出してう。

その紙につたない大きな字で――

確かなる位置欲^はる心
表情となりて
吾が妻の座の
揺らぎは止まず

(O・L)

時計が二時を打つ頃。
床の中で目を開いている三重子、障子の開く音に目を閉じる。
隣の部屋でゴソゴソと着替えの物音。
きくのは足が三重子の枕辺をそつと通り抜けて行く。
きくのは毛布を頭からかぶっている。
三重子は目を開け、自力でやっと起きる。
そして鉛筆をとる。

敬之さま御元へ……

……

そこまで書いて止め、孫の手をとって、枕辺の人形を邪檜に叩く。

SE アーンと人形の鳴き声。

もう一度、そしてもう一度、そして、流れる涙を布団にすりつける。

SE 雨戸を荒々しく開ける音。

三重子、ハツとする。

声 おいつ、寝てるのか……こらっ、三重子！……旦那さまのお帰りだぞッ。

泥酔した敬之が上って来る。

三重子 まあ、そげん酔って、どうしたと？

敬之 おい、お土産だ……鯉だぞ、……お母さん！

三重子 居ないよ、会わなかった、そこで？

敬之 いや会わん、こげな時間に何処へ行ったと。

三重子 願かけに薬師詣でばしとるとよ、この頃……よかったわ、会わなくて……。

敬之 どうして？

三重子 途中で人に会ったら、「願」が駄目になるんだって……だから、頭からも毛布ば
掛けて行ったと。

敬之 フーン……おい、鯉だぞ(中を覗き) うむ、生きとる生きとる、こ奴の血を飲ま
してやるからな……バケツ、バケツと……。

敬之、バケツを探しに行く。

三重子 まあ、裾一杯よごして、転んだと、何処でそげん飲んだとね。

敬之の声 うむ？ ハハハ、ここへ来る途中で一杯だけ……そのバーに美人が居てな、お、
おれが好きだって云うんだ。

三重子 そう、それはよかったですね。

敬之、戻って来る。

敬之 おれのことどげん好きかって云ったら、(両手で大きな輪をつくり) こげん好き
だって云いやがった……おい、どうしよう……なあ、どうしよう？

三重子 お嫁さんに貰ったら？

敬之 フン、強がり云ってやがる。

三重子 私はかまわんよ。

敬之 ……許してくれるか。

三重子 え、許してやるわ。

敬之 許してくれるか……そうか。

三重子 お話があったんじゃけど、そげん酔ってたんじゃ、今夜は駄目ね。

敬之 お話？……お話なら俺の方にもあるんだ。

三重子 そう……じゃ、貴方の方から聞かせてよ。

敬之 お前が言い出したんじゃないか、お前から話せよ。

三重子 私の方は明日にするわ。

敬之 じゃ、俺も明日だ。

三重子 つまらん、貴方はそれを云うために飲んで来たんでしょッが。

敬之 馬鹿云うな、俺は酒を飲まにや、本当のこと言えんような男じゃなか。

三重子 思い切って云うて了うのよ……さあ、思い切って……。

敬之 ようし、云ってやる。

敬之、ふらふらと立ち上る。じっと三重子を見下ろす。

三重子、目を閉じて待っている。

見下ろす敬之——その顔が次第に苦しみにゆがんでいったと思うと、三重子の枕辺
に崩れかかる。

敬之 三重子！……元気になってくれよッ、昔の三重子になってくれようッ……おれは

……おれは……。(泣いている)

三重子の頭を、顔をまさぐりつづける敬之。

なすにまかせながらつたない手で夫を抱く三重子。

木枯らしの吹きすさぶ田園風景。

健やかな妻欲し

以前の汝れ欲しと

酒乱の夫の

狂いて哭くも

朗読 (右の文くりかえし)

柱時計の振子。

SE 遠く鶏が鳴く。

「字形に寝ている夫妻。

三重子 (小声で) 貴方、貴方……。

敬之 う、ううむ？ ああ、もう朝か。

三重子 すみません、起しちゃって……。
敬之 (頭を振り) 昨夜は少し飲み過ぎたかな。

三重子 少しどころじゃなかったよ。

敬之 そうかあ、ここへ来たのは覚えてるが、途中どうやって来たのか、一寸も覚えとらん……。学校の忘年会を出て、田島君と駅前バーへ行っただけでははつきりしとるじやが……。

三重子 ねえ、お話って何？

敬之 話？……あつそうか、それで来たんだ。いや他でもないんだけど、お前の歌、昨日も西日本新聞に出てたろう。……あれを見てて思い付いたんだが、歌集にまとめてみんか。

三重子 歌集に？

敬之 歌集を作って、今まで世話になった人達に配ろうじゃないか。

三重子 ……そんな話だったの。

敬之 なんだ、つまらん顔して。

三重子 ううん、つまらんことなけれど……大分かかるでしょ、お金だつて。

敬之 聞いてみたんじゃないが、二三百部刷るとして二万円位らしい。

三重子 二万円も……。

敬之 来年は吾々が結婚して十年目だろ。だから十周年の記念に作ろうと思ったんだ。……お金の方もそれ位なら何とかかなるし……。
三重子 そりゃ貴方のお気持ちは有難いんだけど……。

敬之 お気持？……今朝は何だかお前、他人行儀だぞ。

三重子 ええ、そうかも知れません。

敬之 どげんしたとか……。

三重子 一晚、貴方のお顔見ててやっと決心がついたとです。

敬之 ……。

三重子 ねえ、私達、別れまっしょう。

敬之 えッ？

三重子 いえ、別れなきゃいかんと思うとです。離婚の理由は、ちゃんとあるとだし……。

敬之 お前、何ちゆうこと云うとか。

三重子 ううん、云わせて……匂いばっかり女じゃちゆうても、あんたばね、苦しめるだけじゃもンね。お別れの記念だったら喜こんで歌集も出して貰うわ。一生その歌集ば胸に抱いて生きてゆくわ。

敬之 今頃云いだしたって遅か、……もう八割方は出来上ってるんだ。

三重子 何が？

敬之 俺とお前の家さ。……たまがらせようと思つて黙つってたけど……。

三重子 じゃ、家を建てとると云うのは……私達の。

敬之 ……ああ、昔の二の舞はさせられんもンな。

三重子 そ、そうじゃったと。

敬之 お前の寝台もあつらえてあるとじゃ。

敬之、煙草に火をつける。

三重子に動揺の色が浮ぶ――が、ようやく耐える。

(間)

三重子 いけまっせん。矢つ張りいけまっせん。……一時の感情で云いよると違うとですから。よくよく考えて云いよるとですから、何も云わんで別れちゃんしやい……。今どげん苦しかちゆうても、一日延ばしやあ延ばすだけ、余計苦しゆうなるとじやけん。

敬 之 お前、来年なあ一緒になつて十年になるとぞ。そげん簡単に別れられるとか。
三重子 ……長い間、出来ん世話ばようしてくれたいことは、どげん感謝してもしきれんのです。……ばつてん、それとこれとは違うとです。

敬 之 何が違うとか！

三重子 人間なあ、やつぱり自然な生活ばせないかんと思うと、それが本当だと思つてです。

敬 之 今の生活が間違つとる云うとか。

三重子 ええ、現実に目ばふさいで来たとです。

敬 之 どうして、そげなこと断言出来るか？……どうしてそげなこと……。

三重子 お願いじやけん……怒らんで聞いちやんしやい。世の中の夫婦には、目的ちゆうもんがあるのです。子供を産み、お互いに成長していく希望があるのです。私らにや、それがありません。

敬 之 夫婦ちゆうもんは、希望がなけりやいかんとか。希望がなけりや、やつてゆけんとか。

三重子 私らは、終りの来るとば待つとるだけです。そのためにあんたば縛つとるのです。

……それじゃ、余りみじめじやもん。あんただけじやなか、私だつてみじめじやもん。

敬 之 俺はそうは思わん……俺達には俺達夫婦の生き方ちゆうもんがあるけん。

三重子 ばつてん、私が病気になつて六年間、一日だつて自信ばもつて夫婦と云える日があつたとですか。

敬 之 あつたとも。今だつて確信もつて云える。

三重子 外見ば云うとるとじやなか……。あんたあ、子供が欲しいと思うたことなかとですか。

敬 之 ……。

三重子 他所の子供ば見て羨ましいと思うたことなかとですか。

敬 之 そりや、子供あ欲しいとは思うさ。ばつてん、それだけが夫婦じやなかもん。お互いに足らんとおつてを助け合つてゆくのも夫婦じやなかか。

三重子 それも、私らは片道キップだけだすたい。このままいけば、折角の貴方の親切ば憎うなるかも知れんとです。それが怖いとです。

敬 之 憎うなるか？ お互いに愛し合つてもか。

三重子 愛しとるから憎うなるとです……。愛しとる、誰よりも愛しとると云うても……ばつてん、口でそげえ云うても、口で云うてもどげえしようもなかもん。(かすかに体をよじつて身もだえ、両手で空を抱こうとする)あんたの愛情ン、私の体ン中で一杯になるばつかりだもん。

三重子、顔をそむけて泣く。

敬 之 俺だつて自分の信念が正しかかどうか判らんことなる時もある……ひよつとした

らお前の云うごと間違つとるとかも知れん。……町の奴らにや偽善者と云いよる者がいることも知つとる……。偽善者かも知れん、センチメンタリストかも知れん……。ばつてん、俺には、お前と別れての生活なんて考えられん。んなら今まで通りやつて行くより他に道はなか、……。そうじゃろう？

三重子 一生は一度しかなかとですよ。

敬之 一度しかなか……。人生なら、尚のこと自分の心に素直に生きるべきじゃなかか、

……お前は、世話ばかけとるちゅうばつてん、それが俺の支えにもなつとるじゃなかか、そうじゃろう？……お互いさまだ、夫婦じゃもん。

三重子 そげして、苦しかことなか？

敬之 なか。一寸ばかり苦しかかって、それが何じゃ。

三重子 悔やまんとか？

敬之 悔やみやせん。

三重子 じゃ、別れとうなつたら……。いつでも云うてな……。遠慮せんと……。

敬之 ああ……。俺も昨夜みたいなことにならんよう酒ば飲まんようにするけえ。

三重子 (感極まって) いいのよ、いいのよ、パパ。

隣室で聞いているきくの、目頭をおさえる。

三重子 貴方……。

きくのの声 起きてるのかい？

敬之 ええ。

きくの、入って来る。

きくの 敬之さん、あんた、昨夜自転車どうしなさつた。
敬之 自転車？ あッ。
きくの ハハハ、田圃の中へ捨ててあつたつて、今先刻駐在さんが届けてくれましたよ。
敬之 へえ……。
三重子 母さん、あの家は、私達の家なんだつて！
きくの 知つとります、この家はおはな屋敷じゃなかですもん……。みんな……。みんな……。あげん大声で話してりやあ。
三人 (笑う)
きくのの目にも涙が光っている。

14 朝の柳川

哀しきは想うまじ
まさぐりて
夫の髪撫づ
夫の髪は柔かき

朗読 (右の文)

15 新しい三重子の部屋 (現在)

お雛様。寝台でそれを見ているなごやかな三重子。

三重子 ……ばってん、先生は。パパちゃにや、どげんしても勝てんじやった。コトちゃん、夫婦ってもんは、汲めば汲むほど湧いて来る泉みたいなものよ……先生たちの関係は、そりや並みの夫婦とは確かに違うかも知れん。ばってん、どげえに恵まれた夫婦だって、ちつとそつとのけわしかきびしか道ば歩かなけりやならんもんね、……先生なんか、並の夫婦の持つとるもん、大方取上げられてしもうたばってえ、それ以上のもんば貰うたとですよ。今ではかえって、病気に感謝したいような気にさえなるとよ。

コト子 (しきりにうなずく) 先生らは、並の夫婦じゃのうて上夫婦じょうなんよ。
智子 そう、上天ドンよ、駅前食堂の……。

敬之と田島が帰って来る。

マル子 あッ、帰って来た。

敬之 只今!

田島 只今!

智子 上天一ちよう、あがりッ!

教え子達 (笑う)

キョトンとしている男二人。

三重子 パパちゃっ、釣れた?

田島 釣れたも釣れたり。

三重子 タッチ先生に聞いてるんじやなか。

マル子 わア、先生たら、スゴイ!

教え子達 (笑う)

敬之と田島、寝台の処へ大きな包みを持ってやって来る。

敬之 今日の魚はこれたい。

と、歌集を出して見せる。

コト子 あッ、先生の歌集。

歌集の表紙

“亜麻色の髪”

みるみるゆがむ三重子の顔。

三重子 パ、パパちゃ……ありがとう、…… (小さく) ……ありがとう……長い間……。

教え子達の中から拍手がおこる。

コト子は一人離れてそつと涙をぬぐう。

田島もコト子の処へ行く。

田島 どげんしたとか、コト子。

コト子 ……中味の歌は先生から旦那さまに贈って……それを旦那さまが本にして先生に……。

田島 ここの先生達は倅せなんじや、日本一倅せな夫婦じや。

コト子はそつと田島に寄り添っている。

早速、歌集をひろげている敬之。

涙の顔を窓外の柿の梢に向ける三重子。

16 その柿の木

来世あらば
身健よかに
夫に添わん
碧明るき
空に柿照る

朗読 (右の文くりかえす)

17 柳川の水郷風景

(終)

(O・L)